

◆伊藤洋二 選 ～「諳んじたい俳句88」～

鷹羽狩行(監修) 片山由美子(文) 石飛博光(書) 二〇〇五年 日本放送出版協会

露の世は露の世ながらさりながら 一茶

♪時に元禄十五年十二月十四日、江戸の夜風をふるわせて、響くは山鹿流儀の陣太鼓…命惜しむな名おこそおしめえ…♪ 十二月十四日は、四十七士の討ち入りの日。その昔に観た『忠臣蔵』が懐かしい。映画館の跡地の近くを散歩していると、当時の木戸口が蘇る。人生は、はかなく、あっという間。時には記憶のフィルムを焼き直して保存しておこう。ただし、良き思い出のみであるが。

水澄みて金閣の金さしにけり 阿波野青畝

金閣寺は、室町文化の傑作で日本の宝、世界の遺産。舍利殿として建てられたもので、鏡湖池に臨む三層の楼閣は二層・三層に金箔が貼られている。ところで、金属が錆びるとは、イオン化傾向の大(錆び易い)小(錆び難い)らしい。元素をイオン化傾向の大きいものから並べると、「貸そうかな、まああてにするな、ひどすぎる借金」。「貸そう (K) か (Ca) な (Na)、ま (Mg) あ (Al) あ (亜鉛:Zn) て (鉄:Fe) に (Ni) する (Sn) な、(鉛:Pb)、ひ (H) ど (銅:Cu) す (水銀:Hg) ぎる (銀:Ag) 借 (白金:Pt) 金(金:Au) 」。銀、白金、金か…、なるほど、持つべきは、イオン化傾向の小さいのがいいなあ。脱線ついでに、ホッカイロは、鉄が錆びる時の熱を利用したもの。ただし、身の回りで自然に錆びている鉄は、ゆっくりと反応しているので、熱を感じるほどにはならない。ご安心を。

菊人形たましひのなき句かな 渡辺水巴

人間の五感(視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚)は、母親との関わりを基礎として、人生で出会う人や環境で磨かれてゆく。故にその感覚の鋭敏さは、人それぞれ千差万別である。「赤子の魂百までも」。五感の基礎を作ってくくださった、ご先祖様、親兄弟、学校の先生方に感謝しつつ、第六感の「心」を磨くことは自身の生涯の課題。しかし、「魂の匂い」とは如何なるものか…。

除夜の妻白鳥のごと湯浴みをり

森 澄雄

掃除、洗濯、炊事、買物と年中無休で家事をこなす奥様方は、千手如意輪観世音菩薩様である。特に、毎日の献立を決めるために、あれこれ考えるだけでも筆者には苦行。家事に加えて、さらに子育て、介護をしている女性は「千手」、どころか「万手」の働き。大晦日は、年越し蕎麦をつくり、おせち料理も用意万端。風呂の湯加減は筆者の好みの熱爛気味に。今年も一年、ごくろうであった。確かに、妻は白鳥のごと、まさに「スワン」様。心の中で「すまん」と唱えつ新年を迎える。

冬の日や臥して見あぐる琴の丈

野澤節子

熱が出て安静にしていた幼き頃の句であろうか。良くなったのだが微熱があり遊びに行かせてもらえない。ただ天井板を眺めるのみ。その古い板目に様々な模様を描き立てて退屈をまぎらわす。お琴のお稽古もままならず、臥して眺めるお琴はいつにもまして大きく見える。そうだ。筆者も暴飲暴食を慎み、健康に感謝して、妻の云うことを「ハイ」の二文字で聞こうかな。

白壁に消えも入らずに毛糸編み

平畑静塔

女性が編み物をしている様は、何とも不可思議である。筆者は、根を詰めてする手仕事は苦手で眺めていても肩が凝る。ひと昔前に姉から黄色のレース編みのカーディガンを貰った。余所行き用に長く愛用したものだ。姉は今でも元気で、編み物を楽しみとしている。そういえば、ヨハネス・フェルメールの『レースを編む女』。この絵の背景も白一色の壁である。

◆日根野聖子 選

毎月、楽しいアートを提供くださっている池田亮二先生。「半呆子」の俳号で、「戯句酒句」という第九句集を昨年末に出版された。印刷から製本まで全てお一人での手作業による貴重な句集より。

敬老会古仏のごとく居並べる

齢を重ねた方には、どこか神々しささえ感じる。今や百歳以上の方は日本に

六万五千人。神々しい仏様が増えることは嬉しいことである。

塵外に遊ぶといいつつ繩のれん

人間は、良い事も悪い事も一度、習慣になって身に付いたものを変えるのは難しい。名誉もお金も要らぬ、物は最小限にして生活を、と言いながら無駄使いをやめられない。

日向ぼこみな一病を持ち寄りて

一つや二つ、弱点、欠点のある方が生きやすいし、付き合いやすい。一病は、つまり優しさにつながる。